

「法廷では守る。ベッドで  
は——甘やかす」

——冷徹な敏腕弁護士が  
私の前でだけ崩れて、  
朝まで甘やかされています

指先が、まだ震えている。

さっきまで万年筆を握っていた長い指が、いまは私のうなじを這っていた。調停室で証拠書類をめくるときと寸分変わらぬ正確さで、背中のファスナーを引き下ろしていく。

「っ……」

「我慢する癖、ここでも出るんだな」

低い声が鎖骨に落ちてくる。法廷で最終弁論を述べるときと同じ、よく通る静かな声。なのに温度がまるで違う。熱い。耳の奥がじん、と痺れて、背筋に甘い電流が走った。

柊一颯。私の離婚調停を担当した弁護士。家事事件専門、勝率はほぼ百パーセント。相手方弁護士から「氷の柊」と呼ばれる男。

——その男が、いま私のワンピースを床に落とした。

「柊さ……」

「一颯でいい。もう弁護士と依頼人じゃない」

名前を呼びかけた唇を指先で塞がれる。その指が、ゆっくりと下唇の輪郭をなぞった。法廷で調書の行間を読むみたいに、丁寧に。正確に。

心臓がうるさい。なんでこうなったんだっけ。

——三時間前のことだ。

\*

家庭裁判所の調停室は、いつも通り冷えていた。

隣に座る柊先生は、いつも通り完璧だった。ダークネイビーのスーツに銀縁の眼鏡。背筋はまっすぐで、書類を捌く手に一切の無駄がない。

元夫側の弁護士が口を開いた。

「依頼人にも言い分がございまして。婚姻関係破綻の原因は妻側にも――」

柊先生が遮った。声を荒らげたわけじゃない。淡々と、でも一分の隙もない論理で、相手方の主張を一つずつ潰していく。

「令和四年三月から令和六年七月までの預金通帳の写しをご覧ください。生活費として振り込まれるべき金額と実際の入金額の差異。これが経済的支配でなければ何でしょうか」

証拠の提示は正確で、言葉は冷たくて、まるで手術みたいだった。相手方弁護士が黙り込む。元夫が顔を歪める。

私はその横顔を見ていた。

――守られている。四年間で初めて、誰かが私の代わりに戦ってくれている。

でもこれは仕事だ。報酬を払っているから。契約だから。この人にとって私は案件番号でしかない。

調停成立。慰謝料も財産分与も、私の主張がほぼ全面的に認められた。

柊先生が私に向き直った。

「おめでとうございます、藤堂さん。最善の結果です」

事務的な声。事務的な微笑み。

——ああ、やっぱりそうだ。私はこの人にとって、終わった案件でしかない。

\*

事後の手続き説明。柊先生は書類を揃え、今後の流れを淡々と説明した。

「これで私の業務は完了です。何かあればいつでもご連絡ください」

握手。柊先生の手は大きくて温かかった。一瞬だけ、その温度に縋りたくなる。すぐに手を離した。迷惑をかけてはいけない。

事務所を出た瞬間、涙が溢れた。嬉しいのか悲しいのか分からない。離婚が成立した安堵と、もうこの人に会う理由がなくなった喪失感が、同時に胸を突く。

——ばかみたい。弁護士に恋するなんて。吊り橋効果。それだけだ。

涙を拭って、駅に向かった。これで全部終わった。終わったんだ。

\*

一週間後。スマートフォンに柊先生から連絡が入った。

『調停の打ち上げを兼ねて、事務所のスタッフと軽く食事でもいか

がですか』

行くべきじゃなかった。分かっていた。でも「最後に一目だけ」という未練に負けた。

新宿三丁目の小さなワインバー。事務所のパラリーガルの女性が二人、先に席についていた。カジュアルな雰囲気。柊先生も珍しくノーネクタイで、シャツの第一ボタンを外している。

——それだけで心臓がうるさい。

柊先生は酒が弱かった。ワインを二杯で耳が赤くなって、三杯で目元が緩む。法廷の「氷の柊」が嘘みたいに頬を染めて笑った。

「……実は甘いものに目がなくて。事務所に猫を飼いたいんですが、大家に禁止されていましてね」

知らなかった。この人にも、こんな顔があるなんて。切れ長の目が酔いで潤むと、少し垂れて見えて——法廷の冷たさが全部消えて、ただの男の顔になる。

胸の奥がきゅう、と絞られた。

パラリーガルの二人が先に帰って、二人きりになった。

沈黙。柊先生がグラスの縁を指でなぞりながら、低い声で言った。  
。

「……藤堂さん。一つだけ、弁護士としては言ってはいけない話を  
していいですか」

頷いた。声が出なかった。

「調停のとき——相手方代理人に『愛される資格がない』と言われて、あんたが泣いた日があったでしょう」

覚えている。一粒だけ涙をこぼして、すぐに拭った。「すみません」と謝った。あのとき柊先生は何の反応も見せなかった。

「あの涙を見たとき、俺は――」

柊先生が眼鏡を外した。

酔って潤んだ目が、まっすぐに私を見る。法廷では絶対に見せない、剥き出しの目。

「あんたの涙を見るたびに、俺が傍にいたいって思ってた。弁護士失格だろ」

――え？

心臓が止まった。止まって、壊れたみたいに動き出す。

＊

タクシーの後部座席。

一颯さんが、「送ります」と言った。断ろうとしたら「依頼人ですから」と返される。もう依頼人じゃないのに。終わったはずなのに。

隣に座る一颯さんの体温が、シャツ越しに伝わってくる。距離が近い。酔った一颯さんは身体の制御が甘くなっていて、カーブのたびに肩が触れた。

窓の外を見ようとした。見ていないと泣きそうだった。

「弁護士失格」。その言葉が頭の中で反響している。本気なの。

酔った勢いじゃなくて。でもこの人が本気で私を選ぶ理由がない。  
完璧な人が、こんな地味な、自分に価値があるかも分からない女を  
――

一颯さんの手が、私の手に触れた。

法廷で万年筆を握る、あの精密な指。その指が、私の手をそっと  
包み込む。

――震えている。

一颯さんの手が、微かに震えていた。

この人、ずっと我慢していたんだ。弁護士と依頼人という線を越  
えないように。触れたい手を、ずっと万年筆に預けていた。

「柊先――」

「もう先生じゃない。調停は終わった」

低い声がタクシーの暗がりには溶ける。握られた手から一颯さんの  
心拍が伝わってきた。速い。法廷では絶対にこんな鼓動を晒さない  
人が、いま私の掌のなかで脈打っている。

胸の中で、終わったはずの何かが音を立てて動き出した。

＊

マンションの玄関前。一颯さんが先に降りてドアを開けてくれた。  
そういうところが、完璧な男だ。

鍵を取り出す。「今日はありがとうございました」。いつもの「  
迷惑をかけない」モードが勝手に起動する。

一颯さんが一歩下がった。

「ここで帰らないと、俺は弁護士失格だ」

また、その言葉。この人はずっと、自分の立場と感情のあいだで引き裂かれていたんだ。法廷では完璧でいなければならない。依頼人に手を出すなんて弁護士倫理に反する。だから我慢した。調停が終わるまで。終わっても。

一颯さんの背中が、夜の闇に溶けかけている。このまま行かせたら本当に終わる。

——私はいつもこうだ。迷惑をかけたくない。自分から求めてはいけない。選ばれる価値がない。元夫にそう刷り込まれた。「お前みたいな女、誰も欲しがらない」。

でも。

この人の手は、震えていた。

——私の手を包んだとき、震えていた。

気づいたら、一颯さんの袖を掴んでいた。自分でも驚くくらい強い力で。

「帰らないで」

声が震えていた。でも言えた。四年間の結婚生活で一度も言えなかった言葉。帰らないで。傍にいて。私を選んで。

一颯さんが振り返った。眼鏡の奥の目が暗がりの中で熱を帯びている。

私はその手を引いて、玄関のドアを開けた。



＊

部屋に入った瞬間、空気が変わった。

玄関に鍵をかける音。振り返ると、一颯さんがシャツの袖を捲り上げていた。法廷で書類を捌くときと同じ、無駄のない動作。なのに目だけがまるで違う。

熱い。剥き出しの、熱。

「一颯さ——」

名前を呼びかけた唇を、指先で塞がれた。

「一颯でいい」

その指先がゆっくりと下唇をなぞる。調書の行間を読むみたいに。丁寧に。正確に。

「ずっとこうしたかった。あんたが泣くたびに、涙を拭う代わりに書面を作って。本当は触れたい手で万年筆を握って——半年間、ずっと」

腰を引き寄せられた。上着を脱いだ一颯さんの体温がシャツ越しに押し寄せてくる。想像よりずっと熱い。この人の身体がこんなに熱いなんて知らなかった。

最初のキスは深くて長かった。微かにワインの味がする。唇を割って入ってくる舌が、法廷の弁論と同じ容赦のなさで口の中を蹂躪していく。

「んっ……」

息ができない。膝が笑う。一颯さんの眼鏡が私の頬骨に当たって、それに気づいた一颯さんが自分で眼鏡を外した。

眼鏡を外した顔がすぐ近くにある。垂れ気味の目元。法廷の冷たさが全部消えて、ただ一人の女を欲しがっている男の顔。

ワンピースのファスナーに手がかかった。

「法廷では守る。ベッドでは——甘やかす」

最終弁論のときと同じ低い声でそう囁きながら、背中のファスナーをゆっくり引き下ろしていく。金具が一つずつ外れる振動が背骨に伝わって、その小さな振動ひとつでお腹の奥がきゅん、と疼いた。

＊

ワンピースが足元に落ちた。下着だけになった身体を、一颯さんの目が舐めるように辿る。

恥ずかしい。元夫に「地味だ」「色気がない」と言われ続けた身体だ。自信なんてない。腕で胸を隠そうとした。

「隠すな」

一颯さんの手が私の腕をゆっくりと下ろす。強くはない。でも抗えない。法廷の弁論と同じだ。この人の静かな強制力には誰も逆らえない。

「綺麗だ。——あんた、自分がどれだけ綺麗か分かってない」

その声に、胸の芯がずきん、と疼いた。お世辞じゃない。証拠を突きつけるときと同じ目で言っている。この人は嘘をつかない。嘘

をつく必要のない男だ。

ブラの上から胸の輪郭をなぞられた。長い指。万年筆を握っていた指。その親指が乳首の位置を正確に捉えて、布越しにゆっくり圧をかける。

「っ……♡」

「ここ、固くなってる。——隠しても分かる。俺はあんたの全部を読むのが仕事だった」

半年間、私の言葉にならない感情を読み続けた男。調停の書面に書かれていない恐怖も、口に出さない寂しさも、全部見抜いていた男が——いま、私の身体の声を読み始めている。

ブラを外された。露わになった乳首に指先ではなく唇を寄せられた。

「あ……っ♡」

舌先が乳輪の縁をゆっくりなぞって、頂点を吸い上げる。じわり、と甘い痺れが背筋を這い上がった。声を殺そうとして、唇を噛む。

「声、殺さなくていい。俺しかいない」

——我慢する癖。調停のときと同じだ。泣きたいときに泣かない。感じているのに声を出さない。この人は私の「隠す癖」を全部見抜いている。

右の乳首を舌で舐めながら、左を指先で転がされた。親指と人差し指で摘まんで、くりくりと捏ねる。法廷で証拠を検分するときと同じ——丁寧で、正確で、容赦のない手つき。

「ん……っ♡ そんな、な……両方いっぺんに……っ♡♡」

「反応がいい。こっちの方が感じるのか。——証拠は随時更新する」

ずるい。法廷用語で追い詰めないで。でもその声が低くて甘くて、耳の奥がとろとろに蕩けていく。

一颯さんの手がお腹を滑り落ちていく。下着の上から秘所に触れた。

「っ……♡♡」

布地がもう湿っている。それを確かめるように、指の腹でゆっくりと撫でられた。

くちゅ、と小さな音がした。

「もうこんなに濡れてる。——これも隠してたんだろ？ 俺に触られたって、ずっと」

凶星だった。調停中、隣に座る一颯さんの手を見るたびに考えていた。この手に触れられたらどうなるんだろう。万年筆を持つ長い指が、私の中に入ってきたら。

全部バレている。何もかも。

「……うん♡ ……ずっと……っ♡」

認めた途端、じゅわ、と下着を染み通して一颯さんの指を濡らす感触があった。恥ずかしいのに止められない。この人に暴かれるのがこんなに甘いなんて知らなかった。

「脱がすぞ」

下着をゆっくり引き下ろされた。太腿を伝った糸が、ぷつりと切